



海に漂うプラスチックごみは、魚や鳥に悪影響を及ぼす。こうした海洋汚染への関心を高めようと、愛知淑徳大（愛知県長久手市）の学生たちが海洋プラスチックでアクセサリーを作り、問題を広く訴えている。

星が丘キャンパス（名古屋市内）にある交流文化学部の林大策教授（53）のゼミは、「観光とまちづくり」が研究テーマだ。学生が自治体と協力して観光プランを作るなど、現場での学び

■メモ 1975年創立の男女共学の総合大学。文学部やビジネス学部など9学部あり、4月現在の学生数は8353人（大学院を含む）。長久手キャンパスと、星が丘キャンパスがある。

海洋プラから アクセサリー

環境問題 広く発信

を重視している。

このゼミ生の5人が海洋汚染の現状を知ったのは、ゼミで海洋プラのアクセサリーを制作・販売しているブランド「sobolon」の代表、山崎姫菜子さん（26）の話聞いたことがきっかけだった。

山崎さんは「可愛い」で地球を守るを合言葉に、カラフルな海洋プラを使ったピアスや指輪を作っている。3年生の中谷さくらさん（21）は、意外な方法で環境問題を発信する山崎さんに共感し、「自分たちもやってみよう」と山崎さんに連絡した。



大学内でアクセサリーを作る林ゼミの学生たち（6月21日、名古屋市内で）

学生が砂浜で拾ったプラごみ（左）と、制作したピアス



ボランティア学生支援

愛知淑徳大が掲げる「違いを共に生きる」の理念を体現しているのが、両キャンパスにある「コミュニティ・コラボレーションセンター（CCC）」だ。センターでは、ボランティア活動をしたい学生を支援している。

センターには子供の学習支援や障害者支援など様々な団体を紹介するパンフレットやメンバー募集のチラシが並び、学生が自由に手に取ったり、職員に相談したりできる。

ボランティアを経験した学生からは「人の優しさに触れ、人に優しくすることを学んだ」「自分の道を見つけた」などの言葉が寄せられており、ボランティアに関わり続ける卒業生も多いという。

ゼミの仲間4人も加わって、山崎さんから制作方法を教わり、知多半島の海岸で海洋プラを拾い集めた。アクセサリーの作り方は、細かく切った海洋プラと透明な樹脂を型に入れて固め、ピアスなどの金具を取り付ける。5人はアルバイト時間を削って練習を重ね、完成度を高めた。

ブランド名は、社会に出る前の「卵」などの意味を込め、「tamagon」にした。イベントでアクセサリーの制作体験会を開いたり、百貨店で開かれた環境フェアで実演販売したりした。訪れた客から「頑張ってる」と応援され、小中学校から、「アクセサリー作りを通じて海洋汚染の授業をしてほしい」との依頼もあったという。

中谷さんら5人は「海洋プラをなくすことはできないけど、人々の行動は変えられるかもしれない。活動を長く続けたい」と話す。

林教授は「学生たちは自主性が身についた。卒業しても、ライフワークとして環境問題に向き合ってもらいたい」と期待を寄せる。

（木田滋夫）

2022年8月2日（火）読売新聞より
この記事は読売新聞社の承諾を得て転載しています。